

言葉と言葉と君への想い

かえで

たったこれだけ

どれくらい好きなのかを尋ねる君はいつも楽しそうで
困っている僕を見て無邪気に笑う
それでもやっぱり質問からは逃げさせてくれない
言葉にしないと不安なのか
そこに定量的な答えがないことを聡明な君は知っているはずなのに
これくらいと言って親指と人差し指を広げて見せる
10cmの間隔に君は怒る
だから僕は言葉を重ねる
これくらいも離れていたくないと
赤面する君は僕の顔を見て笑う
顔が真っ赤だよと
言わせたのは君なのに
けど答えたのは僕の勝手

半分こできない純情な感情

分けあいたいものだけが半分にできない
半分こしたい感情さえ半分こできない
銀紙に包まれたチョコレートだって
半分こできない不器用さも笑って
不慣れな愛情を受け取って
半分こできないから全部あげる
できた隙間に愛情をそそいでください
遠回りかもしれないけれど
言い方や言い回しは気にしないで
言葉を尽くして伝えよう
素直になるのはむずかしい
他人にだって
自分にだって
だから受け取ってこの気持ち
そして投げ返してその気持ち
どんな言葉だって受け止めるから

いつつのおと

一番大切なことは言わない
一番大切な人にでさえも
言わなくちゃいけないのだと思う
けれど私の心は弱虫で
辛くて悲しい私の弱さを
許してくれるあなたがいてくれる
ありがとうだけがあなたへ届くの
もっと言いたいことがあるはずなのに
そうねたった5文字だけの言葉を
言えたらなにかが変わりゆくはずで
変わることは良いことのはずなのに
怖くてしかたがない子猫のよう
優しく撫でてくれるのを待つだけ
こんな私のわがままもうやめね
きちんと伝えるから目を見つめて
近づいて一度しか言わないから
あなただけを愛してるなんてこと

a will

いくつかの問いに対して君は答えを持っている
背中を押してもらったためだけの疑問に意味はあるの
いつだって僕は君の味方でいたと思っていた
それはただの思い違いだったのかもしれないね
そんな不安そうな顔で訊かないで
知っているよ君の望む答えだって
けどここで逃げ道をつくってあげたくないよ
君に必要なのは僕の選んだ答えじゃない

life goes on

空が綺麗だから上を向いて歩いた。
そしたら転んだ。
今度は転ばないように下を向いて歩いた。
そしたら壁にぶつかった。
だから僕は前を向いて歩いた。
そしたら恐怖した。
不安定な足場と壁ばかりの道のりに。
そして僕は横を見た。
そしたら君がいた。
君がいたら、僕は歩けるのだろうか。
こんな、前途多難な道のりでも。

秋空インク

届けたい言葉だけが涙で流れてしまう季節に
プラチナのペン先は懐かしいブルーブラック
声よりも独特な字体で追いかける昨日の背中
見せないつもりが無色のインクが三つ落ちて
いつだって届けたい言葉だけが滲んでしまう
季節はめぐりめぐって今日も別れの秋だった